

この 楽しむよすが

- 音で癒えるもうひとつの居場所 -



はじめに

ストレス社会を生きる現代人は悩みを抱こみやすく、鬱状態さらには自殺まで追い込まれる人がいる。新型コロナウイルス感染状況が落ち着いた今でも満足に生活することができない人も。自宅や学校以外に心がやすらぐ新しい居場所が必要である。

表町について

かつての表町は映画館や劇場が普及し芸術の街として栄えていたが徐々に衰退の一途をたどった。その中でもライブハウスやミュージックパー、音楽教室やスタジオといった音楽に関わる店は残っている。現在マンションの開発やハレノワが開館したことにより表町は音楽を通して賑わいを取り戻そうとしている。

課題

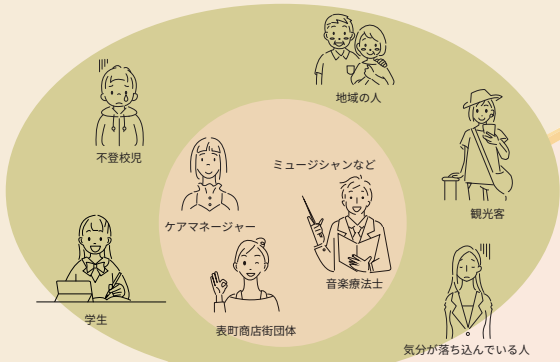
表町1丁目2丁目にはすでに活気があるが、表町3丁目への目的がなく訪れる人が少ない。公共交通機関の利便性が高く周辺地域の人口が多いため、ポテンシャルがあるにも関わらず、暗く近寄りがたい雰囲気がある。

提案

音楽によってすべての人がしあわせになれる場所を作る。座っているだけでも、通り抜けるだけでも音楽が聞こえてくる。心地がいい、自分はこちらにいいのだと思える場所を提案する。それによって元気になったり、何かを始めるきっかけになればよい。

運営方法

この施設を支える人は「よすがの縁」として活動する。主には表町商店街団体の方や、音楽療法士、ケアマネージャーやミュージシャンなどで構成している。この施設を訪れる人は「よすがの縁」の間となり、そこにいるだけで施設を支える存在になる。自分がここにいていいのだという安心感を与えることの仕組みを目指す。



「よすがの縁」

機能

コンセプト

座っているだけでも、通り抜けるだけでも音が聴こえ、誰しもが気軽に音を生み出すことができる場所をつくる。

地域の人たちにとっては、自分はこちらに良いのだと思える安心感のある第三の居場所として機能する。

居心地の良い空間の中で生まれた音は、過去の記憶が蘇るきっかけの音となり、何かを始めるきっかけの音となる。人々に元気を、街に活力を与えるものとなる。

初めて来る人には表町に惹き込むための場所となる。無目的でも何となく足を運べる、生活に寄り添う空間にする。

将来像

地域の人たちから親しまれる空間となり、サードプレイスとして周知される。

ここで心が健康になった人が次の訪問者へと楽しみ方を伝えていく。こうしたつながりの循環が自走し、この施設の音が、声が南時計台周辺から徐々に大きくなる。

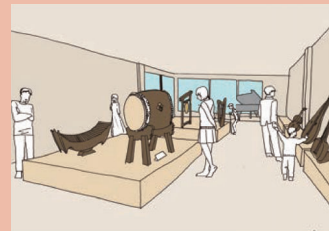
人々の元気がさらに大きな循環をつくり表町全体の活力となる。

平面計画



音楽博物館

古いオーディオなどを展示し、昔の音楽の機械に触れ合うことができる。音楽で借りたものを共有スペースで置くこともできる。



道

通り抜けを目的とする。広場を囲うようになっており、きっかけに繋がる。



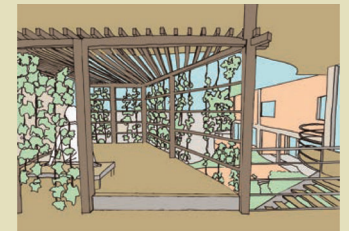
ワークショップ

楽器やものづくりの体験ができる場所の提供。自主的に参加することができ、地域交流もできる。



宿り木

ひとりから使うことを想定し、賑やかな場所とは離れた自然を感じられる場所である。高さを帰ることで視線が合わないようになっている。



音楽資料室

地域の人や訪れた人から寄贈されたCD、レコード、楽譜をレンタルすることができる。画面の中から探すのではなく、実際に手に取り、1曲に出会う尊さを知ってもらう。昔聞いていた音楽の再会や、新しい音楽の出会いに繋がり、日常の刺激になる場所を提供する。



音楽室

音楽の楽しさを知ってもらうことを目的に活動を行う。定期的に音楽療法士を招き、地域の人のための音楽レクリエーションが行われる。複数人で合唱や演奏を行うことで孤独感などから救う。



魅せるスタジオ

地域の音楽団体が勧誘を主な目的で使用。訪れた人に音楽を始めるきっかけを与える。普段の練習風景を周囲に伝えやすい透明性があり、自分にあった音楽団体に所属することができる。